

グスタフ・マーラー（1860～1911）は、『大地の歌』を含めて11の交響曲を作曲した。そこには、音楽の導入、多楽章化と長大化、様々な打楽器や新楽器を使用した超巨大編成等の特徴とする交響曲の枠を超えた作品が並んでいる。第2番『復活』は、これらの要素をすべて備えた最初の大作である。

またマーラーの交響曲は、最終的に4楽章の器楽曲となった第1番、ドイツの民謡詩集に基づく歌曲集《こどもの不思議な角笛》に関連した声楽付きの第2～4番、純粋器楽曲の第5～7番、声楽を前面に立てた第8番と『大地の歌』、再び純粋器楽曲に戻った第9番と第10番にグループ分けできる。すなわち『復活』は、2番目にあたる『角笛交響曲』の第1弾でもある。

ビュローの葬儀で衝撃

存命時のマーラーは、欧州各地の歌劇場でキャリアを積んだ名指揮者であり、創作面では『夏休み作曲家』



1892年のマーラー

だった。そうした中、『復活』の第1楽章は、前作第1番『巨人』を完成し、ライプツィヒ歌劇場の指揮者からブダペスト王立歌劇場の音楽監督に変わった1888年、交響詩『葬礼』として作曲された。しかし、それはそのまま留め置かれた。1891年、マーラーはハンブルク市立歌劇場の首席指揮者に就任。1893年からはザルツブルク近くのシュタインバッハで夏を過ごし、創作に集中することになった。そこで彼は『葬礼』の交響曲

「生と死」ドラマティックに マーラーの 交響曲第2番《復活》

声楽やバンダで奥深い演奏効果
超巨大編成による交響曲の幕開け

文 柴田克彦◎音楽評論家
text by Shibata Katsuhiko



新宿文化センターのリニューアルを記念して『復活』を演奏するバティスト二指揮東京フィル。合唱は新宿文化センター合唱団（3月22日、提供：新宿文化センター）

化を企図。まず同曲を改訂して第1楽章とし、続く楽章も次々に作曲されていった。

だが合唱の導入を決めていた終楽章に合う歌詞が見つからない。そんな折りの1894年春、ハンブルクの上司にあたる大指揮者ハンス・フオン・ビュローの葬儀が教会で行われた。マーラーはその場でドイツ

の宗教詩人クロプシュトック（1724～1803）の詞による賛歌『復活』を聴いて衝撃を受ける。そしてこの歌詞の採用を決め、同年一氣に完成した。

初演は自らのタクトで

初演は、1895年3月4日に1～3楽章、12月13日に全曲が、ベルリ

「暗から明へ至る感動的な音楽」とすることも可能。全体に劇的な展開が聴きどころとなる。

葬礼、青春、嫌悪…そして

第1楽章（アレグロ・マエストロソ、）
まじめで荘厳な表情で一貫しては、マーラーが「英雄の葬礼」「生と死にどんな意味があるのかを問う」などと説明した楽章。冒頭の低弦による

第1主題をはじめとする戦闘的な楽想の中に、祈りのような第2主題が織り込まれる。劇的な変化と高揚時の迫力が主な聴きどころ。なおスコアには「このあと少なくとも5分の休みを置くこと」と記されており、これを重視するケースも無視するケースもある。

第2楽章（アンダンテ・モデラー）
ト、きわめて気楽に、決して急がずに

は、「青春時代の幸福な追憶」などと説明された、メルヘン的で柔らかな楽章。童謡風の素朴な主題の部分に、細かく動く旋律の部分が2度挟まれる。第1楽章との対比や美しい旋律が聴きもの。

第3楽章（穏やかに流れるような動きで）は、「嫌悪が彼を捉え、絶望の悲鳴をあげるような幻影」と説明された、ワルツ・テンポのスケルツォ楽章。歌曲集《こどもの不思議な角笛》の《魚に説教をするパドヴァの聖アントニウス》と同じ素材が用いられていることで名高い。

第4楽章「原光」（きわめて荘厳に、しかし簡潔に）は、アルト独唱で《こどもの不思議な角笛》の「原光」（神に与えられた「おおもとの光」の意）が歌われる静謐な楽章。

「よみがえり」と最後の審判 オルガン、鐘も加わる壮大な終結

第5楽章（スケルツォのテンポで、荒々しく進行して）は、「よみがえりのために私は死ぬ『復活』が語られる長大な楽章。前半は、衝撃（最後の審判）で始まる管弦楽の激震部分で、舞台裏のバンダも活躍する。一旦静まった後半に合唱が登場して「復活」を歌い出し、2人の独唱も加わって徐々に高揚。オルガンや鐘も参加する壮大な終結へと至る。前半の多彩な管弦楽、終盤の感動的な盛り上がりが主な聴きどころ。

ンにてマーラー自身が指揮するベルリン・フィル（自費で雇ったという）によって行われた。
本作は特に構成と編成が画期的だ。一般的な交響曲で通例だった4楽章ではなく5楽章構成で、第4楽章にはアルト（またはメゾ・ソプラノ）独唱、第5楽章にはこれにソプラノ独唱と合唱が加わる。オーケストラは特殊楽器を含む概ね4管の木管楽器に多数の金管楽器と打楽器、さらにはオルガンを加えた超大編成で、第5楽章ではバンダ・舞台裏の別動隊も参加する。
曲は「生と死」がテーマとみなされる。つまり「復活」あるゆえに死は消滅ではない」を語る内容だ。ただし『復活』の題名はどこにも記されていないので、「巨大な幻想曲」や



『復活』を演奏する高関健指揮東京シティ・フィルと東京シティ・フィル・コーア（3月31日、サントリーホール ©K.Miura）